受賞おめでとうございます
区政功労者賞

◆消防団員30年以上
浦野　栄一　　布川　美文

◆自治会・町会（会長・副会長）10年以上
吉川　勉　　立石　恒卓　　安原　清之

◆介護認定審査会委員10年以上
立石　昭彦

◆民生委員・児童委員10年以上
高見　淑惠

（敬称略）

佐伯山緑地（南側）、さくら中央保育園
＊ 同時オープン ＊

平成22年4月号でお知らせした佐伯山緑地の南側部分が、この4月1日にオープンしました。当初予定通り、見晴らしゾーンを含む大森三中側で、散策スペース全体の3分の1が完成しました。ベンチや水飲み場のほか、駐輪場も設置されています。自生する樹木が主体ですが、山桜やつつじなどの花木も植栽され、区民の憩いの場所としてさわやかに吹きわたる風と共に、私たちの目も楽しませてくれるでしょう。今後、東側、西側の順で整備される予定で、26年4月の全面開園が待たれます。

また、公園に隣接して建設されていた大田区認可保育園「さくら中央保育園」も同時に開園しました。

待機児童の多い中、定員70名と心強いですね。園舎の裏が自然豊かな公園という恵まれた環境で、今後、人気の保育園になることでしょう。

入新井保育園新園舎
✠ 2月13日にオープン ✠

オープンに先立ち、２月５日に行われた内覧会には多くの人が見学していました。改築に伴って４月から定員は109名から120名に増えました。屋上の広場にはゴムチップが敷き詰められ、園庭にはプールもあるなど、子どもたちが楽しく遊ぶ姿が目に浮かびます。建物の内部はフローリングの上に新しい家具が並べられ、ほのかに木の香りがしました。

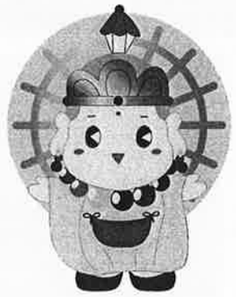
中央四丁目町会
✧「地域の防火防災功労賞」を受賞 ✧

中央四丁目町会が今年1月16日に東京消防庁の「地域の防火防災功労賞」の優秀賞を受賞しました。この「地域の防火防災功労賞」は、阪神・淡路大震災から10年目の節目にあたる平成16年6月に、地域の防災力の向上を図ることを目的として創設されたものです。

受賞した中央四丁目町会は、長年にわたる防火防災に関する活動の中で、特に「大人から子供まで～防火防災意識を育てるまち！～」という点が高く評価され、東京消防庁から表彰されました。

観音通り共栄会
❀ イメージキャラクター決定 ❀

中央三丁目の観音通り共栄会（酒井和夫会長）では、商店街活性化の一助として地域住民から公募していたイメージキャラクターが決定し、昨年暮れにお披露目を行いました。決定に当たっては、プロのデザイナーを交え厳正な審査を行い、最優秀賞、入賞、特別賞を選考しました。最優秀作品には「カノンちゃん」（写真）が選ばれ今春デビューの予定で、着ぐるみも制作していろいろなイベントや状況で登場させ、商店街を盛り上げたいとのことです。



✪ 龍子記念館 リニューアルオープン ✪

龍子記念館は昨年5月から耐震工事のため閉館していましたが、昨年12月22日にリニューアルオープンし、その記念として名作展を、平成24年5月6日まで開催しています。

リニューアルオープンの門出として平成24年の干支・龍にちなみ川端龍子の代表作のひとつである「臥龍（がりゅう）」や人気の高い「爆弾散華」のほか、数々の名作、龍子の俳句にちなんだ作品も展示しています。

編集後記

１面で、かつて中央一丁目にあった山王書房店主の関口良雄さんの著書「昔日の客」をご子息の直人さんに紹介していただきました。昔懐かしいこの地域の風景や文人が数多く出てきます。大田文化の森で借りることができますので、どうぞご一読ください。

２、３面では全面オープンした大森赤十字病院を特集しました。病院に取材し、新施設のほか、災害時に対応した建物の機能や、昨年の東日本大震災の時の救護班の活動などを伺いました。あの大災害は他人ごとではありません。関東でも地震がいつ起きてもおかしくないと言われています。今回取材して、もしものときに頼れる病院が私たちのこんな近くにあることを、改めて頼もしく思いました。病院では、今後、地域の皆さんのボランティア活動を募る計画があるそうです。地域の協力でより充実した病院になってもらえたらうれしいですね。

（齋藤編集委員）

発　行　地域力推進新井宿地区委員会
編　集　「わがまち新井宿」編集委員会

山王三・四丁目自治会	編集委員長	高橋 紗英子
山王三丁目東自治会	副編集委員長	荒 木 秀 樹
山王三・四丁目自治会	編集委員	山崎 三津子
山王三丁目町会	編集委員	荒 井 壽 子
中央一丁目町会	編集委員	齋 藤 碧 子
中央四丁目町会	編集委員	若 生 一 順
新井宿五丁目町会	編集委員	加 藤 弘 子
新井宿六丁目町会	編集委員	河原 神風代
新井宿七丁目町会	編集委員	落 合 松 枝

……共同編集……
監　修　新井宿自治会連合会
事務局　大田区新井宿特別出張所
大田区中央４－３１－１４　☎３７７６－５３９１
http://www.city.ota.tokyo.jp/omori/index.html

わがまち Araijuku 新井宿

「大きな口を開けた自分」
入二小1年　中村　真維さんの作品

～新井宿ゆかりの文学紹介～

関口 良雄 著 『昔日の客』（夏葉社2010年復刊）

大田文化の森から臼田坂方面へ少し入ったところに、山王書房はありました。今回、著者のご子息 関口直人さんからこの山王書房にまつわる興味深いエピソードを寄稿していただきました。

中央一丁目　関口 直人

父は生前このように言っていました。

「昔、大森にちょっと変わった親父のいる古本屋があったと、思い出してもらえたら嬉しい」

一昨年の十月に、32年ぶりに復刊された父の随筆集「昔日の客」（夏葉社）の読者の多くの方々が、一度「山王書房」に行ってみたかったと呟いて下さるのを読むにつけ、父の喜んでいる顔が目に浮かぶのです。

昭和28年、関口良雄は35才の時に大森の新井宿四丁目（現中央一丁目）で日本文学専門の古本屋を開業しました。「山王書房」という屋号は、隣接した山王という地名から名付けたのです。程なく、山王にお住まいだった小説家、「人生劇場」の尾崎士郎先生と知り合い、数々のエピソードが始まりました。先生が書いて下さった「山王書房」の扁額は店に大事に掲げていました。それは今も我が家の玄関を飾っています。

店には面白いほどに多士済々の人が訪れてくれました。作家、詩人の方は言うに及ばず、落語家、シャンソン歌手、役者、NHKのアナウンサー、警察官、泥棒、花屋さん、社長、運転手、画家、小唄の師匠、学生、先生、新聞記者、屑屋さん、世が世ならお殿様、断酒会員、そして古本屋まで、いろいろでした。父は話し好きでしたので、一度意気投合すると話が止まりませんでした。バス停まで追いかけて行くことも、大森駅まで話しながら一緒に歩いて行き、見送ることもありました。中には、初めてのお客さんで終電に間に合わず泊まっていった方もいらしたし、翌日、学校を休んだ教授もいらっしゃいました。作家の方々からも、君の話は面白いから、それをそのまま書きなさいよと勧められては、頭を掻きながら照れていたのでした。ある時いよいよ、尾崎士郎先生が尾崎一雄先生と当時の産経新聞社長の水野成夫さんと共に主宰した同人誌「風報」に、君も原稿を書きたまえと誘って下さり、「正宗白鳥先生訪問記」を書きました。これが頗る評判が良く、父はとても喜んでいました。

還暦を機に本を作ろうという母と私の勧めに、嬉しそうに頷いたのは、亡くなる一年前のことでした。今までの原稿に推敲を重ねつつ、書き下ろしの作品作りに夜遅くまで夢中になっていた日々は充実した時間だったと思います。癌で亡くなる数日前に、必ず本は作るという意志を伝え、一年後に完成したのが「昔日の客」でした。

17歳で上京してから、常に望郷の思いを強く持っていた人でした。故郷である信州飯田の山々への思いの一端が、「山王書房」という店名には掛かっているように思います。ゴッホやセザンヌの絵と並べて、飯田の写真を大きく引き伸ばして額に入れ、店に飾っていました。近所に大そう絵の上手な大工さんがいて、父はそのモノクロの写真を彼に見せて、色鮮やかな水彩画に描いてもらいました。数年するとその絵に雪を積もらせてもらい、故郷の冬景色を店で楽しんでいたのです。幸い、お客のいない時間の多い店でしたので、民謡や大好きな田端義夫の歌を歌ったり、また自己流の朗詠を声高らかに吟じたりもしていました。いずれも瞼に浮かんでいたのは、子供の頃を過ごした故郷の光景だったに違いありません。

今もそうですが大森から馬込、池上に至る界隈は緑が多く起伏に富んだ地形で、父は生涯、気に入って散歩した町でした。夕暮れて西の空が赤く染まると、店を母に任せて、大好きな夕焼けを眺めに急ぎます。大森三中の裏手にある等閑森の丘にもよく行きましたが、晩年とても気に入っていた場所がありました。池上本門寺の裏に都営浅草線の引込線をまたいで、第二京浜国道に渡る大きく長い歩道橋があります。現在は「どどめきばし」と記名してあるその橋を、父は「孤独の橋」と呼んでいました。その橋からの夕焼けは、今でも素晴らしいと思います。陽が沈み行く先には、丹沢山系から富士山のシルエットが美しく見えますが、きっと父はその更に先にある信州の山々をも見ていたのでしょう。

約30篇が収録されている「昔日の客」の中の一篇、「父の思い出」を読むと、何故故郷をそれほどに愛したかが心に伝わります。

幾山河越え去りゆかば寂しさの
果てなむ国ぞ今日も旅ゆく

牧水のこの短歌を力強く朗詠した父の声が、今でも耳に聴こえて来るのです。

◀店頭に立つ著者左奥に掛かっている額が、尾崎士郎が揮毫した「山王書房」の扁額